

共三十本

成形圖說

菜蔬部

二十四



特別
二一
144
23



門二加 /
號 / 44
卷 2423

成形圖說卷之二十四

目錄

葱キ 樓葱ヤグラ子キ 細葱キヒラ 胡椒サツキ 韭ケラ 薤オホヒラ 蒜ヒル 大蒜オホヒル



成形圖說卷之二十四

山蒜 ヤマニル
 落葱 オチカミ
 生薑 ハシカミ
 蘘荷 マカ

成形圖說卷之二十四

菜部 葷辛類

葷辛ハ式に所謂辛菜カンキナにて五辛ゴシンは加良安返カライアヘ毛乃モノと凡ゆ
 此コノ等トウ申マウわあて葱ネギと韭ネギといへるハ皆其薰臭カキの烈ツヨキと
 比ヒせ即キ使シと介ケハ生氣シキの謂イハレありかしこき踐祚センソク大嘗會オホニホノミツメ
 ハ至尊ソウジツの登極トウキョク志シろしめせよし 天照大神アマテラスを告ツケたり
 あふ大禮オホレイにて其神膳ミケモノの中四物ナカヨモツと申マウや一ヒトの葱韭ネギと入イら
 れ天皇内侍所ニギハヤヒノミヤコノウヂノミヤ此寶鏡ミタマシヅメを對ムカひ御影ミカゲを寫シされ神膳ミケモノすし食クハ
 は時トキに此コノのとも用モチひあふとりやされバ 神武帝ミカドよ
 里サト 應神オウジン 仁德ニトクの大御歌オホミカおとよ葱韭ネギの事コト多く詠ユせ玉

成形圖說卷之二十四

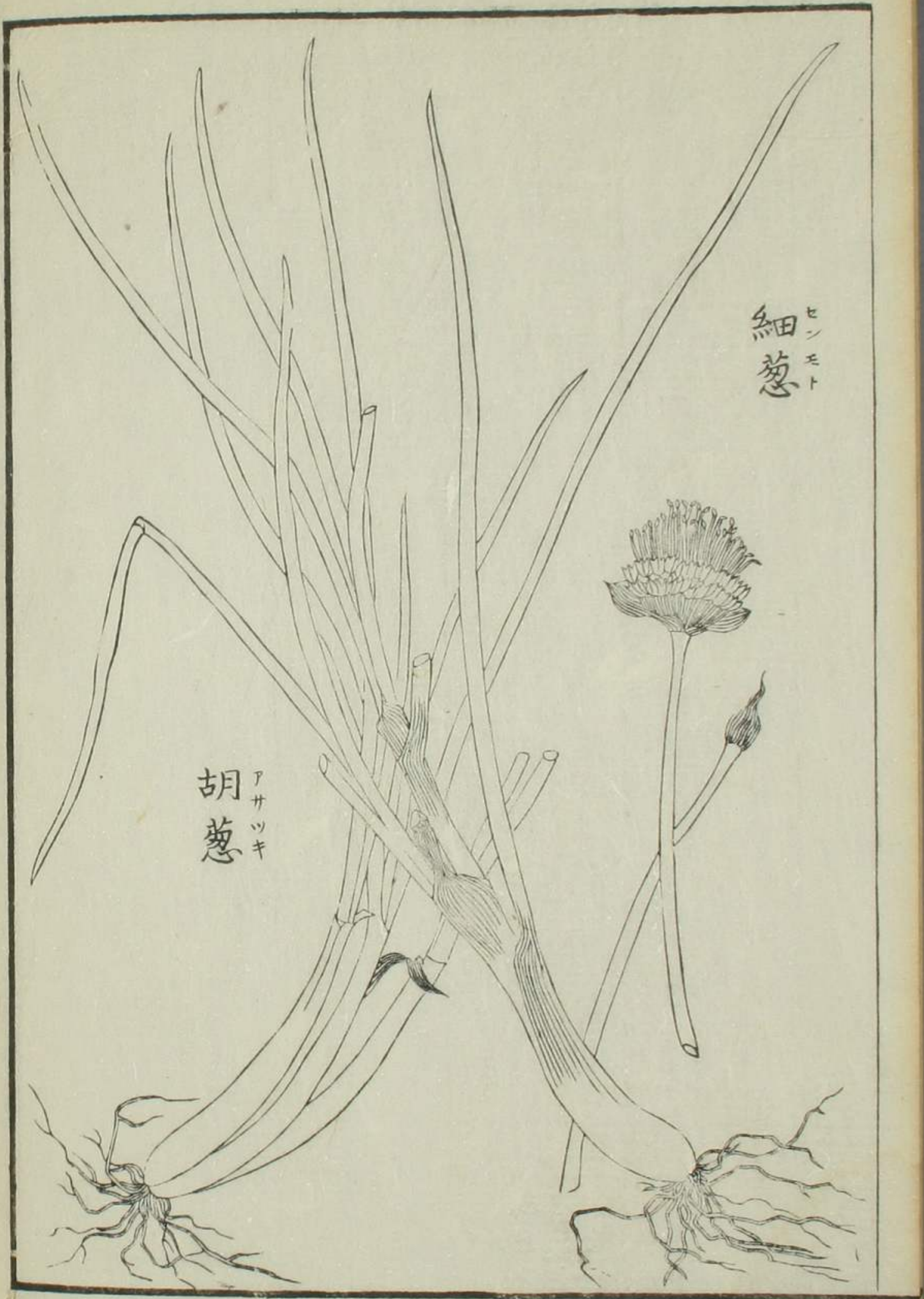
へるも亦おろふべし式も此等の種嘗るゝよし詳み
るさきしりの然と後ハ韭蒜と食料もせざるが稀らみ成
りしハ古の風俗漸く廢つてし法おど取難られしあり
五辛菜以食すれば其種もろりて各日期乃忌むる蒜ハ
三日薤ハ一日或ハ五辛とも皆七日忌ふどあり此は釋
門の葷酒と禁断せるが我も移せるなり社代より 清
和御宇の時までは天子の御饌も鹿と猪鹿とはへま
ふと多田氏が獸肉論も辨へると見て知るべし釋門
も五辛菜を食ふと忌むるを念ふし志は増が故と
六と楞嚴經も載るるは佛の善教もて色慾飲食の害

弊といふくはて幾先と戒懼乃事あるを志すそのせし
むにそのくだらざるも宗て易行方便の流傳りて葷酒
の戒ハ物うは妻帯魚肉は忌みし師も法も倍負
と織とも内顧ざるもむあり悲むべきう形も履霜
のおそれ竟も東漸しあるものども寧ハ有ども其が
おとし○西土五辛菜の事荆楚歲時記引周處風土記云
元旦造五辛盤正月元旦五薰練形五薰葱蒜韭蓼蒿芥也
按本州薤の附録は蓼蒿といふこと、羅存齋爾雅翼
は西方大蒜小蒜興渠即阿葱葱荅葱為五辛宋圖經も韭
薤葱蒜薑也といへり李時珍は葱蒜韭蓼蒿也と注し又

をク
み云

此ものハ自凝島と表しとのみて洲濱とハ島の浮の入
曲と化るが有る名と以著中集天曆七年十月十八日殿
上の侍臣左右を分て各洲濱にありし時洲濱に葉一本
残るゑと云ふは中洲濱の風流さほくとも又花鳥情
歌合に負指してある也天徳の歌合より金根の歌に枝
残る洲濱に居てかどはし乃所におく花の枝にて数と
れり也類聚雜要鈔に洲濱の著臺ハ 宇多天皇延喜十
六年五十葉の御賀ありて云々用られ 二條帝永曆の
頃までハ云々されきと兼増譚に洲濱ハ今ハ島臺にて

二尊の故事あり島ハ即自凝島の畧にて臺ハ居盤の
名あり二柱乃神斯國に天降むりハ國土の初発し
て夫婦偶生ハ人倫乃造端されけ歳首婚禮乃儀式
備ふるものと蓋尚古此遺風也後に高沙の松比妻せぬ
み副て尉と婆と夫婦偕老に取ふせると二柱乃御事以
學つり洲濱と蓬萊と稱ふ由ハ雄畧紀に水江浦島子
鉤やしより蓬萊山と云事と載られ万葉にも老とせ
む死せざむして永世に在る者と云詠て蓬萊とば老
むせむ死せぬ郷にて所謂不老不死の縁語也
印本
到天長二年今歲浦島子歸自常世郷 雄畧天皇御宇
入海至是三百四十七年とあるハ後人贅筆なりと云
又



細葱 センモト

胡葱 アサツキ

和事 清異

葱白 葱莖

蕃名才イエン

水晶管

葱苒

物皆宜故云菜伯和事

葱鍼

葱名細目諸

葱青

葱名唐韻

葱袍

延喜式子營葱一段種子四升苗一千二百把惣單功八十
 七人 中 八月下二月殖廣志云葱有冬春二種和名鈔子冬
 葱と布由伎と訓也即本州子つゝ葱葱あり一名ハ大官
 葱とろえりの凡葱ハ冬月のものをその白根豊大し
 て味も爽あり冬葱ハ夏ふし秋その根を厚地ハ分植れ
 バ冬ふいりて感ふは春ふいりてふまゝ宣し時々
 その根と分植ハ ワケタユ 四時種ふとふし葱乃種ハ異也の

地におろしからば東武変らるる出るとのよろしそ
申ふも埒玉、那岩附の産と好ぶとせり下野佐野是日
光及上野のわづりふて培養するも夏あり美濃の宮代
葱チキまゝ佳春葱を種子あり八月の子と蒔マキ春生は景い
まゝ肥フツラ豊トウぶると分ちと乾と分ワケ枝エといひ稍シヤウ長チヤウて苜モク麻マと
苜モク麻マといふその根りも再生するもその是即葱ナツキあり本
州ふ水葱一名漢葱といふ是なりその種子を正月ウ
ゑて夏分ワケ植ウヅるもの秋月盛なり和法ワホフく雙フタヘ本ホとふせり
仁賢紀ニケンキの秋葱アキキの轉イヤフタ雙フタヘ納ノミといへるハ即是あり和訓栞曰
根葱ハ根を賞ウツク以テ葱ノ分ワケ葱ハ分ワケて採トべく刈カ葱ハ刈テ用

うべきの名あり○天皇の御車初行幸ハ葱花輿ウツクのめ
さるよしふと有職鈔ウツクに見えしり○橋梁欄檻ハシかどの護
朽クとぎばうしといふハ漢語鈔ウツクに葱臺ウツク比良ヒラ岐波キハ之良ニ橋
両端所リウタン豎ジュ之柱シユ其頭似葱花故云とありて岐波キハ之ニあり比
良良ヒラヒラの上下と畧リヤクして岐波キハと濁音ダクオンの助詞シュジとハ音
便ベン俗ソクの擬寶珠ニホウジュ本ホン法ホフ師シあり書カキ又或説マタに神人の祢宜ニギギて
子コ稱ナヅケと葱ウツクみつけての義タマシありといへるハ浪ナミ説セツぞ古言コトコトの
神カミ子コ禱イハレおとと祢ニギギぎおとといへる古今集コトコトの祢ニギギぎおとと
さのサのノちチあアんン社シャととふとあるとおとへ
贊サン主人シユジン饗ウツク神カミ者モノと見え此
間の祢宜ニギギハ即イハレ祝イハレと高タカきり

書無逸疏以言
告神謂之祝祝

葱白氣味生辛温あり熱を以て甘みして温あり毒なし
 地黄と服する人忌むしといへば蜜及鶏卵雉
 山鳥と同食すべからず性穢を忌凡禽獸肉と同煮る
 時葱其味と奪ものなり生葱と多く食へば神を傷り
 性損すありハ同涙をいづると湯子煮て臭氣と去り
 食ふ宜し○生葱主治一切の魚肉毒と殺し五藏を通し
 ます馬乃秘結し通し得ば卒倒する葱白三四寸計小
 さりて兩鼻孔に法し入れを忽快通して却て湯子せん
 じて溺血と治し瘀血と散し衄血を止以痛耳聾連閉短
 氣とをさめ痔漏の痛と緩め藥毒と解○痰ふけりて正

氣のほりる、葱白細み切三合小麦麩三合塩二合和
 勻二包ふか炒熱して縮めて本綿あても包病人の脇
 の上と熨べし○吐瀉の後脱陽の証吐音やまげ薬も受
 ざる者あり葱白一握法と索めてく、根と毒を去ると
 捨てて切口と起火して燃し熱する不を病人の脇下
 着せしより火熨て火と熨べし
 ○活人書陰毒腹痛厥逆唇青く卵縮り六脈たえんとせ
 し亦此法と用ひ熱氣透入し子足温りて汗あれば瘥
 云○小便血みあり出るハ鬱金の末一匁葱白三莖水
 二合入一合ば煎し用ふべし○諸物及百毒耳み入る
 葱の淨を耳中不灌入れバ自出○胎動
 妊婦の胎氣和せ
 或ハ夫の爲

くるしめられ胎内動腹^入葱白と濃煎^して飲^しむ
 まくするを胎動といふあり
 魚し○小兒便閉^{大小便とも}不通^{腹を}葱白と搗^て
 汁とと乳汁と等分子調^て小兒の口中^小搗^て乳とあ
 じへ吮^下さふひれ^バ即通○疝氣衝逆^{此証陰囊い}
 少腹ふどひき葱白ときざ^{炒熟}と本綿切^子包^後
 裏とむすべし乳香の末と加^ふる^{心腹}卒^痛み
 急^{以上}濟○卒^死葱と^以て丹^子刺^丹中^及鼻^中よ
 更^魚いづる^ハ控^むこと^なし^血ふさ^ハ療^しが^ぬし^方
 ○凡^凡尿管^中小^わら^ぐて^胞屈^伸とな^し津^液不^通葱^系
 と^以て^尖頭^と除^陰莖^の孔^中小^内深^三寸^微口^と用^て吹^す

腹^脹バ^津液^大子^通て^愈
 せ^いて^胞子^と以^て畏^分て^處とな^し更^子替^換下^と
 壓^ハ即^通^方本^事○胞^轉して^小便^と得^さる^子ハ^琥珀^一兩
 葱白十四莖^右水^四升^煮て^三升^と取^葱白^と琥^珀と^末
 と^なし^卵小^篩湯^中小^入湯^服す^ること^一升^日三^度
 ○衛生易簡方^小琥^珀○小^兒中^惡暴^死葱^白と^下部^及鼻^と
 中^子納^立と^ころ^小活^得効^方○卒^心痛^牙闔^緊く^穿て^絶む
 と^せし^葱白^五莖^皮鬚^と去^接て^膏の^如く^し匙^とも^て
 咽^中子^入灌^子麻^油と^もて^寸咽^子く^ぬる^{こと}と^得て^即
 雙^瑞竹^末定^粉^錫也^二錢^葱白^二寸^と用^て研^たば^らし

葱ニギ子ニギ和ニギ丸ニギこなし酒ニギみてたくりくごをも立ニギこころよ志
 るしあり春方○傷ニギ經ニギ血ニギ筒ニギと破ニギち血ニギ出ニギこニギ葱ニギ一斤ニギ炒ニギ
熱子ニギ烹ニギして之ニギと熨ニギ集ニギ成ニギ○小兒ニギ卒ニギ死ニギ故ニギおきもの葱ニギ白ニギと
 取ニギ下部ニギ及ニギ兩ニギ鼻ニギ口ニギ中ニギ小ニギ納ニギれニギバ氣ニギ通ニギす或ニギハ嚏ニギて即ニギ活ニギ○金
 銀ニギの毒ニギ小ニギ中ニギあニギるニギ小ニギ葱ニギ汁ニギと服ニギべし本附ニギ方ニギ○小兒ニギ臍ニギの突ニギ出ニギ
 ると治ニギるニギ葱ニギ白ニギと煨ニギて研ニギ碎ニギき臍ニギは付ニギべし○小兒ニギ小便
 の通ニギずる時ニギハ葱ニギの細ニギと採ニギてその末ニギと少ニギし切ニギる長ニギくし
 て女ニギハ陰ニギ門ニギの小便ニギ道ニギはし入ニギき吹ニギべし男子ニギと小便ニギの
 出ニギる口ニギ小ニギ入ニギき吹ニギべし葱ニギの中ニギより小便ニギ出ニギるなり○肩ニギ脊ニギ
 臂ニギ痛ニギと治ニギるニギハ艾ニギ葱ニギ白ニギ根ニギ握ニギ生ニギ姜ニギ五ニギ三ニギ味ニギ搗ニギたニギら

かし焼ニギ酒ニギとたニギぐニギりニギその中ニギは浸ニギ痛ニギじニギ取ニギとおさニギ一ニギ薰ニギ
 べし焼ニギ酒ニギあニギる時ニギハ好ニギ酒ニギと用ニギひてよし○房ニギ馬ニギして疼ニギま
 ハ葱ニギ一味ニギ水ニギにて煎ニギして飲ニギむべし或ニギハ痛ニギ雨ニギは附ニギる時ニギハ
 立ニギ所ニギは驗ニギあり○蜂ニギの蜇ニギくニギく小ニギ葱ニギ白ニギと布ニギて灸ニギくべし○
 蚯ニギ蚓ニギ蝸ニギ牛ニギは蜇ニギくニギく少ニギは葱ニギ汁ニギと塗ニギべし○小便ニギ不通ニギハ
 葱ニギ白ニギ車ニギ前ニギ葉ニギ半ニギ夏ニギ田ニギ螺ニギ白ニギ粉ニギ臘ニギ紅ニギ水ニギ調ニギ六ニギ味ニギ一ニギは研ニギ和ニギとき
 ゆらめ臍ニギの中ニギは垢ニギて上ニギと紙ニギりてより重ニギあり○小兒ニギ生ニギ
 て乳ニギと飲ニギむ小便ニギせざるニギは葱ニギ白ニギと一寸ニギは切ニギて母ニギの乳ニギ
 少ニギて煎ニギし小兒ニギの口ニギと漱ニギば乳ニギと飲ニギ小便ニギとを○打ニギ傷ニギハ
 葱ニギ白ニギ砂ニギ糖ニギ等ニギ分ニギは合ニギせ稀ニギく上ニギは附ニギべし○脱ニギ肛ニギ又ニギ痔ニギの痛ニギ

子葱と煮て脱肛に布きれば入る○うはま同小は葱白
 根たゝ子熱湯に入るよく出して切て洗ひておし葱を
 ると亦おし一上方○小便するハ葱白一杵爛し炒て
 麝香と加へ分て両室に化し共子布おて包し肚臍の
 下と輪し慰ば即通方簡便

葱オウゴン 古名れ赤と考へ此は蘭葱とアウ、キと訓との
 の種族こそ和訓葉は齋宮の忌河は塔とアウ、キと
 云は阿蘭若の意といへど葱薑の負九輪の何なりと似
 たりとて俗に塔のたつと云ふて蘭葱より出ると
 詞ありべしとあり此は葱と云ふといふも塔の形は
 何象よりいふべき又床のキと云は和名鈔道調曲
 又唐人三臺といふ也碎御日月は三臺曲は唐の則天
 伝るこそ三臺といふ言をも三階葱と云義又符へると

三階葱 薑葱

樓葱 龍角 龍爪葱 羊角葱 五爪葱

播葱 本經 逢原



形状は即葱にして肥大あり夏月葱心より大莖と擢そ
 の端は細白花と簇生く葱花とありとありと正中は細
 葉と生し花謝て細葉長けり葉聚りて薺瓜の如し
 久くして本葉枯て孫苗と生そその莖稍の聚葉と杆挿
 てもちと活す或曰此は種はありと沃地み生るとる

の老葱ありといつて是況酒の近し

葱葉大隅國熊毛郡種子島土名あり此地は古時多藝國
世牟毛登一本藩蓋千本の義秋山蒜と知毛登と云り
倍良沖繩土名此の南島の産小て古の時
又後葉の音と轉してベラと稱へし名の此の産小て古の時
呼あせるハ南微の方語あり分葱千本と回物小
細葱本州和名引七卷食經又引崔禹錫食經沙葱莖葉皆
名鈔引廣志冬葱和名布由村と別條と標し和
又曰有凍葱凌冬不死今按凍葱即冬葱也又凍葱分莖栽
時無子氣味亦佳と又ゆ是は因て凍葱と
千本分葱に充る況あり未の處ありぞ



此葱ハ南地ハ多し蓋東方の淺葱と同種ハ小異るハ
風土ハ由きて莖ハ夏葱に似て長八九寸中虛ハ端尖る
根ハ顆何り三五窠相依て生る生ハ白く枯きハ赤し六
七月根顆の赤皮と數重を剥去て沙地の微溼氣の何る
島ハ分荷あり小便と十分水よして蓄ふべし馬通ハ宜
しうどむ十月小春の比南風の暖氣と得て方ハ長きを
此時皆拔て食ハ更ハ復瘦細との或ハ旧種と極ハ再種
のこの冬中雪霜ハ傷ハ軟ハ旨く明春二月ハ至ハ甚盛
ふして香し味甘美して葱ハ優き也○此の子花おく
夏ハ乃死と採て日ハ乾し茅葉麻袋おどろ收藏べし稻

穰ワカ子包むべし其根実乾細て用ミ中らむ又葱蒜キヒルの
穰ワカ子チも亦穰ワカ子包めば肉脱ヌクてよろしうシを按オシ此千本センキト
てふものは西州ニシノキに産イラる菜ナめて純チ中南島沖繩オキナふ及ん
てハ東国ヒマカシマの葱チヤツル管ガが如ニく蒜ヒル韭ミよりモ此千本センキトあり盛サに
植ウて朝夕アサユフの羹シレともモ羹アヒモともモをカれ猶ナ奥羽オクホより蝦夷島エモ
至イるまで胡葱コウソウの多オホく産イるが如ニく然シはハいふしへに千
本センてふものはゆるゆるえざるハ山蒜ヤマニルと知毛登チモトと稱イふもの
轉ウて此コのものと千本センをカ目メしとモおもモふカさカはハ在ム
昔上国カシに安良アヲ々ハ伎キとリふ者モノあり今西南ニまで千本センと稱イ
ふる穰ワカ子チや和名鈔本ワナシロ和名多オホく蘭ラン蒿カウの字ジアラハキ

と列ヨ々々蒿カウハ即キ山蒜ヤマニルの名ナめて本州ホノシュにも蒿カウハ小蒜コニル野生
ありとハ家園ケエンに移ウツすしシより後ノチハ蒿カウとハ山蒜ヤマニルとカし蒜
ハ家蒜ケニルとカしシとカへハ字鏡ジキョウに蒜ニルと家ケアラハキ
と訓クニふハ即キ家葱ケニルとカいハが如ニく茗葱メイソウと對オウて名ナしハはハあ
らじラ然シ而シテ安良アヲ々ハ伎キとリふ名ナハ始ハジ安康紀アノキに蘭ラン字ジと訓クニけ
ハ通證ツウテイハ荒アラく葱ニル之義ノイ謂イフ蘭葱ランソウ也ナリと注ツせハ蘭葱ランソウの字ジハ本
州ホノシュ和名蒜ワニルの一名蘭葱ランソウ和名古比留コヒロ又令マシ義解イゲ辛菜シンサイ部ブに
大蒜ダイニル薤葱シヤウソウ茗葱メイソウ蘭葱ランソウ興渠キョウキと臚列ロリキし蘭葱ランソウ讀ヨミてアサツキと
又マタえハゆるカらカハ蘭葱ランソウてふものは東国トウコクのアサツキとて
西州セシウにてハ千本の穰ワカ子チありカとカはハ其シアサツ
成形圖說卷之二十四

キと千本との東西地道の多かりて千本の状最終葱は
肖て但細し其氣味清香あれば蘭の字法しも是がとし
又アウ、キの本蘭州の名あると此細葱は冠らしつ亦
西州は産ると千本と呼ぶせしむも識がとし或人の説
は蘭の本州の澤蘭にてサハアウ、キとも白根ともい
ふもの也又一説は蘭は赤標の嫩芽にて内侍所の神
饌に供するもの也此赤標の嫩葉と摘て菜飯のおと料理
ぬきけ芬芳よし又白標と山蘭と稱ふとも乾葉塩漬
ふどに粥へ神供ともゆゑは標にて作し箸と蘭箸と唱
ふは名は内侍所の神饌にも献るものあれば標とアウ

、キと潤よし説とせよといつり因再案に古はアサツ
キ千本とアウ、キと云へしし中世より薫辛菜と
思ふあとの出来て赤標の嫩芽と採りてふありはけ
りし又山蘭ともものも本は荅葱ありしと後白標は
換られしはあじじく字鏡は辛夷と山蘭は注し和名
鈔も辛夷と云々訓はアウ、キの箸も本は辛夷
の材あるへくおもふ今も木製はけりき村といふ
ゆゑに辛夷多き地と又同鈔は蘭蒿とアウ、キと訓
て生薑蜀椒芥蓼橘皮ありし薑蒜類は收り又字鏡は蓀
字阿良々支といふ蓀は後の誤寫歟説文蓀薑属可以香

之にさしハ漢語抄本朝式等に島蒜の字填めしも夷島
 あいに産するなるも是れがとし稲氏の水菖葱とし多
 識編胡葱と充しも皆わろからし今義解は蘭葱と何
 さつきと訓きハ蘭の葱と義ありて興渠にれめお
 毎と何ろくおと準擬て後しも又享保復言に香葱と
 せしも清人の俗稱おて出處審ある者とれ思はれど
 ○此ものハ状蒜の如く葉ハ夏葱ふ類て軟く細長
 一根ハ小蒜の如く赤皮ありて細長く白顆と着く八九
 月に種おろし春苗發て簇生ぬ二三月の頃おひ盛あて
 蔬とあせり関東地方ことばに多し非とひくく庚とも

て培つり五月に種子と收て陰乾して蓄ふべし
 主治禽獸自死の肉毒中なるハ胡葱煮汁と冷飲べし

計美良 書紀○即非あり 神武の大御歌に
 美良 日計氣也謂臭氣也 釋紀に大非とせしハ思くハあ
 加美良 古事記 應 古美良 和名鈔又菜總名也とせし
 おとせし 神の大御歌 久美良 萬葉集注に父々け莖と
 古こは小あふと云 久美良 萬葉集注に父々け莖と
 右よ云父々け莖の古言也○今按よ加計久古の 多太
 四言皆通音共辛薰の氣と指言るものあらん
 美良 新撰字鏡○多々清濁未詳あり 美良 延喜式○
 蓋常非の謂 秋姑く其音に記せり 美良 蓋當時既
 上の四言の詞 仁良 今名仙覺万葉鈔に美と仁と通
 と畧せしゆや 仁良 浪速國とあはるといへる



薔ラツキヤウ

月ごありおれ五辛中第一小して一次う、種バ久う
 絶るおとあく長生の菜ありき九月の頃実を收め春蒔
 敷しおほくそ其はどめうと嘆なげふせしき、肥糞、草灰
 をりて蒔へりのを包糸は扁へらくして中実を微こく、劔脊けんせきあ
 けみ似たり冬うを包糸を刈二月小いうを種かゝるべし
 其法根より上三寸をうり去て剪きべし日中よハ忌とい
 つり凡一歳に一度剪べし其種子を取りのを一剪小る
 を或は一剪もきるおとおし其剪ものには後冷灰もて蒔
 へば再び生易し八月花を采サキ九月種子を結ぶその色黒
 潤ツツありて扁へらありき日有風を交小乾て後收蓄ツツムるものか

或は二月の頃根と分て疎ス布フうウくク強キヤウべしベシさサすスれ
 復フクうウくク繁ヒカリシラ茂シラそのノちチりリ○凡ソド圃ボ中チウへヘ塵チリ芥カとト布フふフとトい
 むムをヲしシ○一ヒト種シュ冬トウのノいイりリてテ葉エフとト萎シむムのノあアりリ俗ソク是シをヲ賀ガ
 比ヒ良ラとトいイふフ○又マタ一ヒト種シュ大ダイ韭ソありリ根ネ白シロくク味ミ佳ヨクしシ外ソトのノ圃ボ
 てテ冬トウ月ゲツとトれレとト土ツチ窖コウのノ内ウチにニ花ハナてテ紫ムラサキのノ黄キナンド嫩ニあるルをヲ黄キナンド韭ソとト
 稱ホトてテ古コ人ト貴キ賞シヤウとトいイふフ○本ホン艸ソウ心シン足ソクえエりリ中ナカ臣シン壽シウ辞ジ
 弱ヨカマシ韭ソとトいイふフしシものノ良ヨク味ミをヲいイふフやヤいイふフしシべベはハ皇
 國クニ小コてもモ常トモにニ用ヨウるルものノとトもモ足ソクえエてテ式シキにニ韭ソ搗キ四シ斗ト
 とトいイりリ醃マク藏サツしてシテ蒸シとトあアずズべベしシ○一ヒト種シュ夜ヤ麻マ仁ニ良ラありリ即
 山サン韭ソありリこコろロ韭ソのノ山サン野ノのノ中ナカにニたタのノづヅうウうウすスるルものノ

其花紫も根も赤、園の種と異あり、こころなし、但その臭氣
 いとむしきのし○又一種水澤の中を生ずるものあり
 其形つきの韭、ことあらず、本艸山韭金爾雅金葍山韭救
 荒本艸に紫韭と野韭あり、野韭即山韭あり、本綱諸葛韭
 亦山韭也○羣芳譜水韭五六月堪食、北戸録水韭生於池
 塘中、葉似韭、字林簽水中野韭也、時珍云有山水二種、氣味
 或不相遠也、氣味辛澁、くて甘、少しく酸と帯て熱あり、毒
 あり、其性稻稈と忌ひ、酒後及蜜牛肉と回しく食ふべか
 らず○主治五藏と和し、胃中乃熱と除、洩血及腹中の冷
 痛と止、煮食ハ痰癖と愈し、腰膝と暖まると喘息血運あり

人よよしけおせんして腸痔脱肛と洗べしその子に洩
 精溺血とろりや腰膝と暖め小便頻數遺尿女人の白淫
 白帶と治あそ○吐血瘀血おて元氣の接りばるるに非を
 搗汁と取三四盞と服すべし狗中らるるしといへど後
 必愈○驚怖卒死凡人夕暮うくハ夜中酒を登或ハ郊野
出で或ハ空冷屋室を遊び又ハ
ぶの地をけき忽ハ異形の物とえて口鼻の内へ邪惡の氣
を吸入驚然地を倒れり足厥冷両手と握面色青黒或ハ
口鼻より清血 非汁と取口鼻へ灌入る○疝氣衝逆て卒
と流す事あり
みくろしむに非汁と飲しむ○舊瘡ある人狗涎瘡口を
フルカス
入るときは昏悶に至るものあり非汁一杯ばるる五六日
一度づつ 報へし○誤て錢あるひハ銅鐵の物を吞み非

の葉と羹とし多く喫べし非柴物と纏繞て肛門より下
 るあり○禽獸自死のものハ毒あり人食て毒の中らる
 ハ非汁と服べし濟急○鬱肉漏脯と食て毒の中ハ鬱肉
蓋し宿と隔つ 鬱肉漏脯ハ鬱肉ハ
屋の雨漏り沾たり脯肉あり共皆毒あり 非汁三升と飲
金匱 ○獠犬咬百日の内常に韭菜と食て更妙千金○
要畧
 狗人を咬くると瘡中腫上り灸し非汁三合と飲日々小
 三五度方 聖惠○誤て蜈蚣と吞み非根とも子連て水子搗
 一大碗とややくべし醫法指南 ○喉痺と治る少は非と生ふ
指 咬べし○瘡よ虫沸み非の葉研つぎ板まつけ
日 乾牡蛎と入る粉ふし附べし○漆瘡よハ韭菜研て

附べし○又方鍊漿と塗べし○又方糯米粉をたたく
 附べし○又方白沙糖を少く合せて塗べし○聾耳少は非
 と按てその汁と耳に入べし○又方搗栗と粉をし髪
 油少く調附べし○百貴の耳に入らば少は非と終ら
 てそ汁と醋を和て一滴耳に入べし○又方桃葉を搗て
 其汁を一粟耳の中に入べし○風犬は唾を少は非の
 汁と塗べし○又方良酢と細く附べし○又方非石灰搗
 て餅のめくおし陰干しをて猪の油少く附べし○陰囊
 大は痔痛甚しむ時ハ爛て膿水と出ると治は非根研
 し蕎麥粉と交合せ丸めて小豆の大さ少く白湯少く用ふ

○蛀牙疾少は非実と瓦を焼挽き入るると瓦
 と並葉の筒と虫牙は高き薫ぶし○腫物痛と治む
 非葉藍葉連錢州鱧腸州石灰五味等分何も搗鉢少く
 研合錢を少くして日は乾入を度く粉おしワルハコベ
 の汁少く煉附べし合する月は八月よし但二十日限也
 ○咳嗽し胸塞るものは非と根おから搗紐て汁を服べし
 以上和方○春記は長曆四年四月十四日云々今日始服
 一萬方
 非州依風病也

於保美良 延喜式○此古美良み封つてり即
 薤あり訓蒙圖彙み於保仁良と訓る

奈免美良新撰字鏡の奈免良通伎夜守唐音辣非の
 人辣非の字とラ、キウと呼ぶ又享保中清客珠
 復言ハ此ハのと辣香と書ハマク香ハ非の誤アリ

紫若紫の俗稱也

薤本作鴻薹以上

葱以上本 薹藥性奇方

薑根也同上引大清經

蕃名モレイ

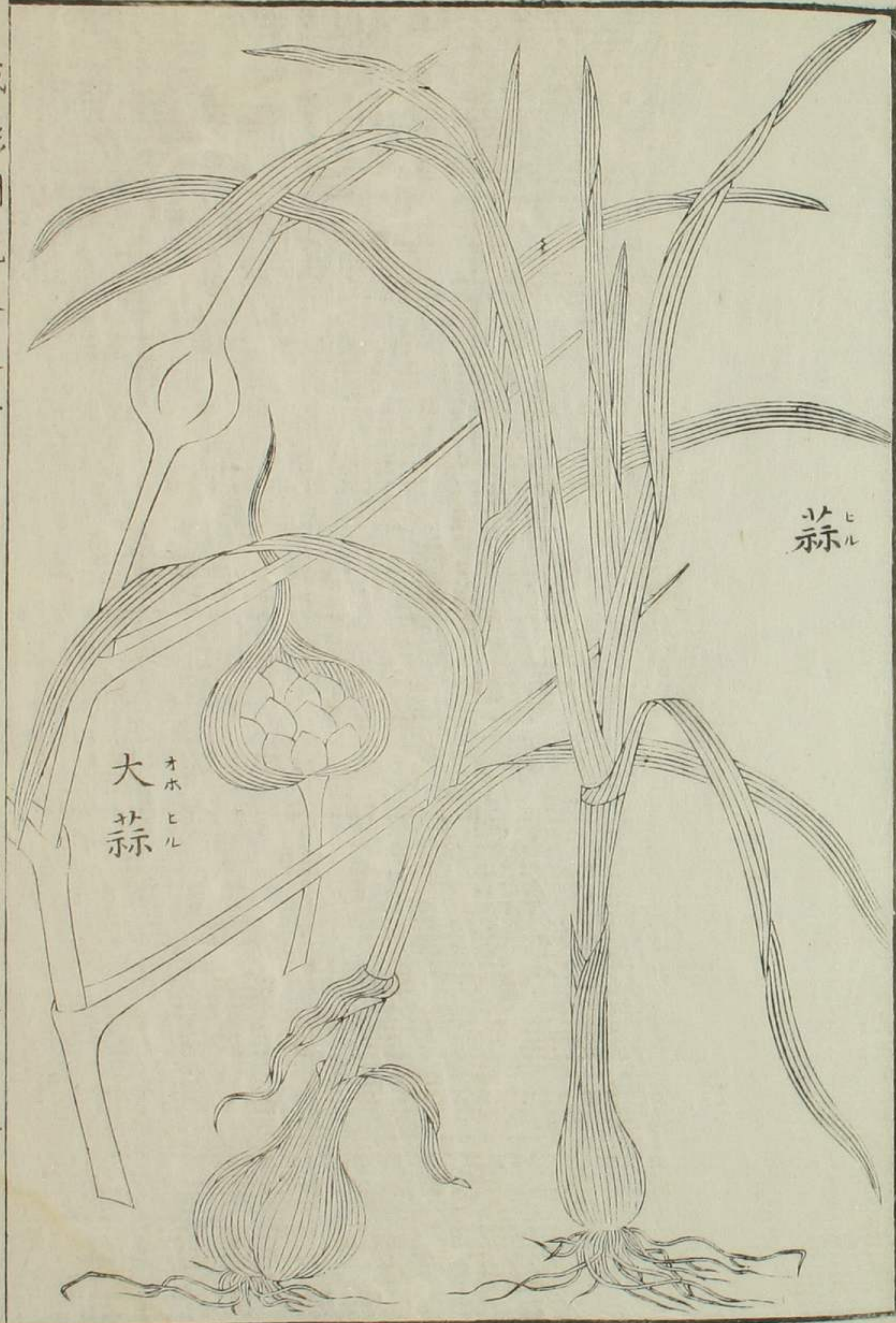
葉ハ非ハ似テ三稜アリ冬月ハ莖て春復生を花ハ紫白
 小して実ハし根ハ小蒜ハひシく上皮紫色あり正月
 の頃ハの根と分裁をズし種法ハ始先日ハ晒スと一日

菜芝名醫 大韭別錄

薤子音 羊芝本性要集引

菘子音 薤火

ちぢし一顆ガ分テ溝ニ列ベ土と覆ヒ其上と結固む
 べし小便十分水ヲて敷ク焼テ土柔めハ縮シ
 けをそのり埤雅云薤宜白軟良地種法一本率七八支
 諺曰葱三薤四言種葱者三支一科薤即四之也支多者科
 輒圓大故以七八為率此法ハハ月ハりその
 葉ハ翠ア肉ハ根と振ズし葉ハ黄色クりてハ
 肉瘦てよろしカ根ノ表皮と去鬚と剪洗淨ツ
 糟アハ醋醬油ハ淡砂糖と和シ儲ハ久シきと種ハ
 臭氣と減テ味ハ佳アリ煮食シても亦よろし或ハ露薤白の薤ハハの於保美良ハり李時珍以前ハ明的の



確阮おし唯李氏の釋ける所とそそ於保美良あるふと
 と志きり尚詳考と埃をし

薤白 典藥寮式に薤白ニ 氣味辛苦小して温滑あり毒を

し但蜜と同食をべう〜〇主治寒熱と除水氣と去中
 と温め結氣と散し又痢冷瀉を治を黄くおし食それ

病人と利し〜と女人帯下赤白と治を風水腫痛を搗て

塗べし〜と蜜小和て湯火傷小塗ハ甚妙あり〇卒死

救、薤と搗汁と取鼻中と灌 要金匱 〇蜘蛛の咬く小薤白

と嚼て傳きば立ところろ小効あり 聖惠 〇驚怖卒死 並の

注薤白と嚼て温酒小て灌ハ即醒 本方 附方

えーの 一説に比とハ並秋葱の轉雙納六七顆並生ふと
 留ハ助辞アリ 按ニ 應神乃大御歌ニ去来安藝野ニ蒜
 摘ムクニ我行道ニ香妙花摘ト何ト私記曰先称臭氣
 物者欲称芬芳物之發語也蒜ハ葷菜の中薰臭尤甚し故
 橋花の馥郁といふんとて先此ものを詠むるありあき
 野ニ蒜摘トあれハ野園大小並ニ泛ク比畝ト称へしと
 後も其蒜トハ名多別多ん西土ニても旧ク蒜ト何ク
 ハ今の小蒜少テ大蒜ハ西域ヨリ得ところ遂ニ大小ト
 分ち呼ぶト本州ニ記しぬ○内膳式營蒜一段種子三石
 惣單切九十三人 畧中殖切六人 月 芸三遍又曰蒜一百根 二准

升正二四十一月十二月 又蒜房六斗 料塩五斗 蒜英五斗 料塩四
 青進五六七八月十進 又蒜房六斗 料塩五斗 蒜英五斗 升四合
 又蒜英根合漬ホリ古ハ常の食物ニ供ひしもの
 大小ト分ちいふを培養の法ハ大蒜小蒜おわす
 要術云蒜收條中子種者一年為獨辦種二年則成大蒜 科
 皆如拳又逾於凡蒜矣又云并州無大蒜朝歌取種一歲之
 後還成百子蒜矣其辦粗細正與條中子同 蒜白氣味辛苦
 大蒜辦變小蓋土地之異者也 蒜生魚雞雞卵生薑とれおしく
 食ふあつあつべし○主治霍乱腹中安り ぎと治
 し疫邪と除く 俗ニ夏の土用初日の朝ニ蒜一兩片赤小
 くとも又疫疾流行の時ニ蒜と茗と或は擦テ丁腫
 下ニおく 又蒜葱の油ニおく 世説ニ仲叔が食ニ菜
 及雁瘡ニ塗又煮食へバ穀と消る 世説ニ仲叔が食ニ菜

其のありて候了るものいへらく生蒜ハ臭く
 して食と消るものなり小仲叔々食の菜あり生蒜と
 遺るハ咳べしとあり蒜の食と消す ○嘔吐及乾濕霍亂
 あり昔より言傳ふありあり ○已らる小蒜と煮て汁と服し臍中灸すべし ○諸物
 及百蟲耳入小蒜と搗て汁とすり耳中灌バ自出
 濟急方 ○聖惠方 蚰蜒
 耳入此方と載す

於保比留 延喜式○字鏡亦
同し即大蒜也
 奈麻為 新撰字鏡○蓋生蘭の義
飲其葉状とていふ也
 年仁久 或曰此と食穢の才一とありして其穢と叫ひ
て人肉といふと漢の張騫種を西域胡中より
 大蒜 別名醫 葫 同上○漢の張騫種を西域胡中より
 鶴頸 呂久登字 仁

蕃名ウイアルデロク

今世弘く種もの是也八月の頃其根一瓣と分て圃中
 並殖れど明年といふり數瓣と殖せり年久しき者は
 愈多し夏月莖を生して花開その莖亦食ふ至秋又至
 夏と法ぶその莖も亦殖べし温物として病人の脾胃と
 調和し寒溼堪べし西土人最嗜茹そのもの我西偏へ
 漂到の清商ども菜蔬ハ毎も此大蒜と蘿菔とと望
 乞て汲山入るりあり此間の蒜ハ彼方の勝て
 味ありて味の外は香も食ふあり ○凡蒜類を表
 ふ小便尿灰汁と佳とす塵芥稻稗と布あくと忌大蒜

の肉は一種む大あゝそのありはハなゝ実あり小なる
ハ末に実あり和名鈔に蒜顆とあり

氣味辛温ふし毒あり久く食ハ目と損を補藥と服人

食ハ魚うぐ又生魚雞雞卵生薑葱蜜と同食ハあゝ

かゝべし○凡禽獸肉の羹は少し加へて其腥氣と去べ

し蒜の臭氣甚しきあゝ諸肉の腥氣と掩とるゝぬ○主

治癰腫膿瘡と敷し風水惡痒と除き蟲と殺を或ハ云五

みしてをゝ生蒜ニワリ俵の中に入をハ夏月蛙を又

蒜と食ハ人の尿と菜圃に灌ゝ周歲虫と生せんと此皆

の化あり夏月此と食ハて暑氣と解し中暑と醒す源氏

物汁は極熱の草藥と服をゝあゝは此故あり又うぐ食

と消すの効あり續農家貫行に蒜ハ夫食の加藥あり因

せゝも製薑に蒜とと搗て醋とめて和し食事と常又齏と

あゝり他男大食して腹脹てハ肩を息許して働あゝ

むあゝむじりより百姓の家におの蒜をまく儲へて未

食の如藥とし他男たのあゝぬやうに皆用ゝ事あり今

ハこれと用ゝ者あし是百姓の穡より出しあり五辛の

中蒜は蒜の能光一にをうハ能食と瀦して性氣と益

し又疫病と除く妙ありて夏上用の入り貴人も食し

て疫とはらゝ禁厭に神人僧侶蒜を忌といはど唯一

の家は憚らざる况や俗人は好んで五辛を忌むといは

は唯蒜と穢とし食てせ○二便の閉をる時は生蒜と

擦て足心は貼るべし又齧齒の痛堪ざるも其擦をる

と痛む方の頬を塗て一兩次も易きハ頓愈て永く

その患を除く又婦人産後の血暈は生蒜と擦その液汁

とと硝子瓶ダイロ貯密封しシ臨用リヨウの時封トウと解トキて瓶口ビンとバ
 鼻孔ハナをあて、嗅カあじれば極キョクて強ツヨクあり又瘡瘍ソウヤウの初ハジメ灸シは
 生蒜ナマニと切片キキて腫心シモノ貼シて灸シするシら、敷シ壯ツヨクのシて驗シあ
 り又疣目ウヲメの属タテよかくしてよし○中暑ナドナリは大蒜多少シの
 研シ碎シ道傍ミチノヘの熟土シキとすり一ツよのたてを上ウヘの清シ
 きると取シ吹シべし中暑ナドナリ或ハ倒シして人とあはれ冷シ汗シいで多
 鼻ハナ中ナカの入シ或ハ蒜シとす水ミヅ○霍亂クワラン手足テ轉筋テは大蒜と研シ
 ぬの根ネのし足タラシの心土ココロふまじり貼シ付シべし○衄血ノドは木
 蒜シ細ホソは擦餅シのぬくおし錢シのたさめして右ミドリの鼻ハナより出シ
 ぶハ右ミドリの足心シ貼シ左ヒダリハ左ヒダリの足心シ両方イソノヘより出シるふえ両

足の心ココロ貼シべし血止シて水ミヅで洗シひ去シき○諸蟲咬傷シ小
 大蒜と食シして酒サケと飲シ且蒜シと拵シ爛シして患處イハレに塗シて其上ウヘ
 は灸シすべし○蟹カニの毒ドクは中ナカくは大蒜と水ミヅを煮シて汁シと
 取シ飲シべし○臍風シ面赤オモく腹脹ハて晝ヒル啼ナドいて夜ヨ啼ナドて乳チと吐シくと終ハら
 臍シの邊ヘリ青黒アヲあるハ治シし凡ツ大蒜と切シ臍上シ灸シす
 べし○方カタ濟急シ○中暑ナドナリは大蒜一大瓣シと嚼水シで送下シを若嚼シ
 こと純シむハ水ミヅで研シ汁シとせぎ飲シしむ三因シ○臍風一
 めい成シハ必カナラ青筋シ一道シあり上行シして肚ハラに至シて両イソノヘ盆シを坐シ
 せ宜シしく筋頭シ灸シす、あつ三壯シあつて截住シべし十シ
 八九シと活シを遅シなれば心ココロを攻シて死シる又法シ小艾炷シとりて

蒜と腐く臍中歐氏保の灸を嬰錄 ○小便不通百藥効なき小
 大蒜甘遂カク同しく搗餅カクとし臍の上小貼カク艾火カクして灸す
 れハ極く驗あり危証簡 ○蝦夷人箭の根カク毒と附カクて射
 る故カク人畜カクとも一カク敷カクに墮カクはカクし其毒ハ番椒カク蜘蛛カク附
 子の三種カクと用カクふカクの夫カク中カク々カク時カクハ大蒜カクとすカク包カクと
 ませて其痕カク傳カクハ毒頓カク解カクなり凡カク毒カク中カクしカクハ肉と
 剉カクりて藥カクと傳カクくカクと云カク ○蜘蛛カクの咬カクくカクハ大蒜カクとりて
 地カクを磨カクて其泥カクと塗カクふ外臺秘要方 ○蜀椒カクの毒カクと解カクるカクあり
 ○蜈蚣カクの類カク人カクと螫カクくカクハ少カクハ大蒜カク或カクハ小蒜カクと斲カクくカクと
 て其汁カクと傷カクふカク塗カクりてよし肘後方 ○錢瘡カク少カクハ蒜カク生薑カク等

研合カクて布カクを包カクし搗カクその上カクを石カクと燒カクきカクるカクべし ○齒痛カク
 少カクハ蒜カクと研カク方カクの手カクの脈所カクハ豆粒カクりカク附カクべし ○蝮蛇カク
 少カクハ蒜カクと隔カクて灸カクべし ○蛇カクの屬カク女陰カクハ入カクくカクハ蛇カクの
 尾カクと急カクハ刀カクあカクて割カク辛カクもの生薑カク蒜カクの類カクと割カクくカクハカクと
 さカクと絲カクりて縛カクて糸カクば自出カク也卒尔ハ引カク拔カクべし自
 出カクと待カクべし今按尾カクと割カクて急カクハ吸カク管カクと又方醇カク酢カク天
 目カク一杯カクハ塩カク少カク入カク搗カク立て用カクハ蛇カク乃カク死カクかり又方鍊カク漿カク
 と入カクきて妙カクあり ○婦人赤白帶カク下カクハ蒜カクと黑カク燒カクし糊カクと
 て練カクわカクどカク丸カクめ湯カクりて十粒カク廿粒カクづカク用カクふカクべし ○療疽
 少カクハ蒜カク葉カク藍葉カク連錢カク艸カク石灰カク分カク等カク研カク合カクセ熟カクて餅カクとし八月

あり所在ハ原隰山野にほし此もの人園に移栽れば
変て家蒜とありともいひ細葱のありいつ

氣味辛温小して毒無し○主治婦人血疲子苦酒を磨し
て傳せバ効あり○膈腫ハ野蒜実二十キハト九一霜二釜三煤四二五細
末小し一七日は用一日は三度づ湯みて服べし
和方一
萬方

山蘭キサキの延喜式即荖葱あり○或曰是はヒヨトトリ花とつり
のあり尚菝葜の所は辨へず辛夷も山蘭に似たり

古比留コヒレ和訓栞ありひハ古比コヒ父コヒ佐サらるり
て断金の臭あり成りり涉世録相思州の義と同

し相思の二字萬葉集に古比と訓あり山蒜ヤマニ波比留ハヒレ根ハ蒜小して葉の
行者ウチヤ蒟ニ蒟ニ禪場ニ蒟ニ天

台蒜ダイニ以上三名を俗中の方言あり此もの僧尼も食ふ
の肉は此ものを食ふと云ふと神人佛氏にも食ふ

荖葱イソニ千金山葱ニ爾雅○和名鈔引蘇敬
注葱有數種山葱曰荖葱
隔葱 鹿耳葱

以上救荒本草 蕃名ダスローク

此もの山葱の種にして人故に營はかし偶藝圃の盆
種とし観覧に供ふ所の葱ハ玉簪菜菔の属に似て微
あり夏秋の交氣心よりの葶と似て花さく形ハ蒜花の

生薑 別名醫 百辣雲 譜藥 炎涼小子 根事 物異名 〇本州 舊根

志夜宇賀 保志波自加美 夷乃干薑 多識編天竺

詳る 保志波自加美 夷乃干薑 多識編天竺

也 〇今按 此二名 漢書紀 吳織 穴 織 子 綠 故 あり 由 八

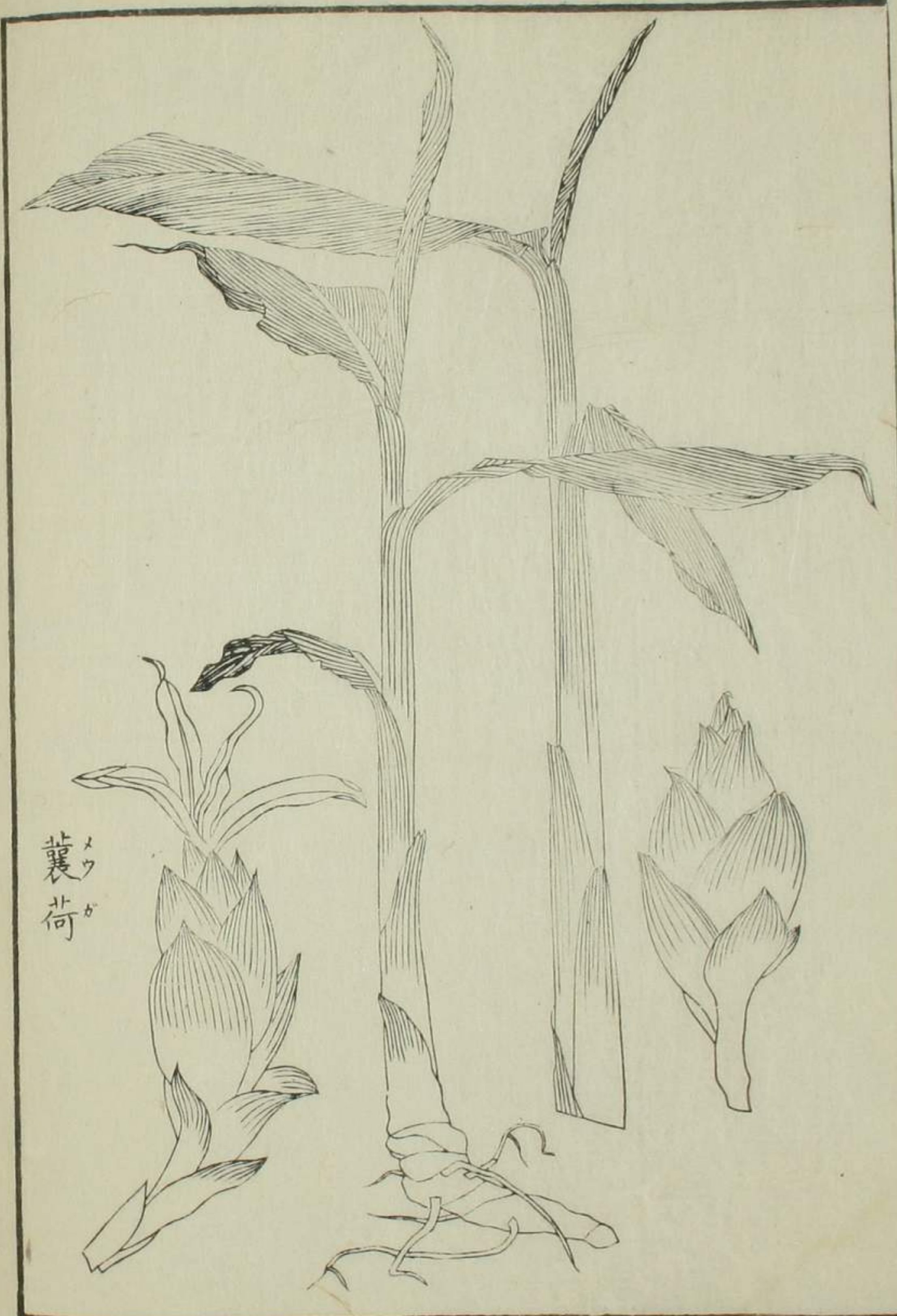
久禮乃波自加美 生薑 干薑 訓 字 鏡 安 奈 波 自 加 美 以上

車者如薑形 〇今按 此二名 漢書紀 吳織 穴 織 子 綠 故 あり 由 八

久禮乃波自加美 生薑 干薑 訓 字 鏡 安 奈 波 自 加 美 以上

也 〇今按 此二名 漢書紀 吳織 穴 織 子 綠 故 あり 由 八

久禮乃波自加美 生薑 干薑 訓 字 鏡 安 奈 波 自 加 美 以上



薑荷

と母薑 定薑 和名鈔引養性要集 乾薑一名定薑

蕃名ゲムブル

延喜式營薑一段種子四石惣單功七十八人 中殖功四人
四此種大小柔硬のふあり九州及け四國わたり 産ハ
大小して柔子尤辛辣あり関東地方のものも皆小あり
中柔硬両種あり柔小して筋少きと良とす其圃ハ濕
地ふよろしきれど暑と畏るものなり夏ハ炎威と覆
ひ冬ハ凝断と防ひ地と易て暖ま移し養ふべしあり
こわれど乾くまへ植れば又枯萎なり二月の頃舊根
と栽れば四五日より黄芽と発し既小新根と生じ

今江門近郊にてハ土窖の中小醸し表ハ四時乾くあり
なしこれ日用かく食うるを常よりひて精神を爽ふ
すゆもの故に論語に薑と撒びして食と之が為あり
本州子章魚薑醋 これ 多く食へど人の智慧と耗すと
食之とも有り
今の按子内膳式推薑三斗 料塩六升汁 又生薑四石五斗
料塩一石四斗二 槽 擇薑女孺單五十人女丁十二人半給間
升汁槽四石二斗 食ハ 又神名式加賀國波自加彌神社○大神宮四月
十四日祭に遠江神戸より種薑と献るあり神事年中行
事に裁らる今諸國神明宮の歳祀に生薑と鬻く蓋しあ
まゝに奉つくあり

氣味辛温にして毒なし春月食して養生の氣と助く秋
 月ハ秋月くくくくくくく目病と患るゑとありまゝ
 夜くらゝあゝあゝれ收斂の氣と発散をまゝ兎肉焼酒
 と同食するあゝと忌といつて○野猪甚薑と畏る故に
 合食をべゝゝゝ凡山畑に芋ホとゆゝに初薑汁と少計
 あぼりけをハ野猪終に芋と握食をといつて○主治
 水毒と解し胃口と穿き藥力とめぐらし風邪を熱及胸
 膈の惡氣と除き痰喘とゆるめ冷氣と去る其汁を服し
 ていゝ良○痰厥此病中氣と細し惟はじめ眩暈あり
湧がめく咽をほまの齒とらひ白礬末こふし生姜の自
しめ目とえつめて息ありし

熱汁よて調へ服べし○人轆子の漸くは風雲のうら
 ち中がめ頭痛暈倒する小速に熱湯の中は生姜の絞汁
 と入拌飲て亦よし○疔毒おて氣とより失ひゝ小蒼
 耳一握生姜三文和合して搗爛て泥のめくし生頭酒一
 掬と入和勻てあはれ渣と去り熱酒おて搦し汗たは出
 るとよしとす濟急○腹中疼痛或ハ寒或ハ熱或ハ積食
 或ハ積血辨ずべゝゝに藥も亦施こと不練生姜三四斤
 搗爛し畧擠て汁と去鍋に入炒熱し布袱兩箇と用て先
 一箇とは生姜一半とつゝみ熱て痛を小布熱氣蒸熨と
 候て冷バ復換つゝ間歇あゝ輪流換熨べし痛止ハ乃已

是起死回生の功と得あり危証簡 ○凍死と療ふ生姜
 及と去搗碎き陳皮槌碎き水三碗と用て一碗ふせんじ
 温服べし奇効良方 ○脚氣心ふ入て悶絶つゝ死せんこすふ
 ろ小半夏二生姜汁二升半ふ半夏と内煮て一升八合と
 分て四度ふ服べし外臺秘要 ○蜈蚣人と螫ふ生姜汁と
 て雄黄の末とくゝのへ傷處小貼て瘡又蜈蚣の耳ふ入
 ぶふ生姜汁と灌ハ自出つ ○半夏の毒と解す小生姜
 汁を用ふ姜とくらひ傷られ服とふす小生姜汁を飲ハ
 立こころ小消す ○萬苴の毒中ふ生姜汁或ハ濃姜湯
 と服 ○竹筍と芋の毒中ふ小生姜汁よし以上諸方 ○痰

喘促と治る醴酒の方生姜合五細 水三升入き二升
 煎し米一升と飯またき麴一升右の薑汁みく甘酒と
 造用ふべし ○喉より血と吐くふは土生姜と乾細末
 小し甘艸少入湯と攪とて用ふ ○中風足筋ひくと
 ろふ生姜の汁一味童子の小便とせ用ふべし ○水
 小溺水 少は生姜の汁と牙ふぬりてよし ○打身腫痛
 ふハ生姜汁麥粉酒糟同く搗合腫とふふ附布あて縛
 してをべし ○小瘡溼瘡の洗藥ふは生姜葉椶葉等分水小
 てふと極蒸し手悦あて洗ふべし ○百蟲耳ふのふと
 ハ生姜研て其汁と一滴耳の中ふ入べし ○又方乾姜と

細末コトコし耳の中へ少入コトコべし○又方醇酒コトコ一滴耳の中へ
 入歩コトコ行コトコまれば虫のけり○聾耳コトコは生姜の汁
 と一滴耳の中へ入コトコべし○淋病コトコは血淋コトコは生姜コトコ甘草コトコ
 中天目コトコ水ニ入コトコべし煎し用コトコ○被重創コトコ疼と止コトコる小
 ハ生姜コトコ研コトコ龍腦コトコ少コトコ糖コトコ合唐墨コトコと磨コトコて其汁コトコあて己コトコ一コトコ
 巾用コトコ○猪鹿コトコ又ハ諸獸コトコの毒と解コトコハ生姜と搗コトコちり
 布コトコよて漉コトコ連コトコは用コトコべし○蕎麥コトコの毒コトコ中コトコくハ生姜酒
 と熱コトコて飲コトコべし○赤白痢病コトコハ生姜汁コトコ一コトコ好茶コトコ甘草コトコ各コトコ五
 胡桃コトコ実コトコ一コトコ水二碗入コトコき一コトコ碗コトコ至コトコまで煎し服コトコべし○金傷
 緊血コトコと止コトコ口鼻コトコより血コトコ出るハ生姜甘草コトコと細末コトコおし一

度コトコよ五コトコたびり湯コトコひて一日コトコ三度用コトコあべし按コトコは是コトコは
 血コトコのゆコトコと剛劑コトコとコトコ厳コトコしく血コトコと止コトコし血コトコ動活コトコの血コトコ溢コトコき
 鼻コトコより出るコトコあコトコづしコトコ以上和方コトコ
 乾生薑コトコ延喜コトコ主計コトコ式越前コトコ薑コトコ今コトコ藥肆コトコ中コトコ乾薑コトコと呼コトコ
 ものコトコ三河遠江コトコわコトコりコトコ外コトコ白内竊コトコ是コトコ堅コトコ実コトコも
 のコトコの遠江薑コトコ名高コトコし又コトコ近來コトコ生乾薑コトコとコトコ呼コトコ做コトコものあり皆
 切片コトコて日乾コトコ薬用コトコは用コトコハ伊豫コトコの産コトコと良コトコと本コトコ州コトコは母白
 浄コトコしして結実コトコとよコトコしとコトコ故コトコは白薑コトコと呼コトコり又本
 經逢原コトコは乾薑コトコ其嫩コトコものを白薑コトコといコトコふと又此コトコ說本
 州コトコとコトコあり凡コトコ西土コトコの書コトコ生薑コトコ一片コトコとあるハ重コトコ一コトコ女コトコ
 て生薑コトコ半分コトコとあるハ五コトコ重コトコありコトコ一コトコ錢

半分ありて五分ありてをい
つり猶壽親養老新書にあり

氣味辛温小して毒ありし○主治咳嗽と治し腹痛虚冷と

散し撒て屑をかき酒を和し偏風と治す○虚熱吐血

小つやありて或ハ喘息して手足厥冷きハ吐瀉し遠

ハ吐血してやまじ虚陽の浮泛なり血色鮮紅あり

ハ丸大切乾姜を炒末となし童子の小便ありて稠濁す

丹溪心法附餘中風中暑中惡乾霍亂一切卒暴の疾

小此方を用ふ濟急○口中爛るるは干姜黄連等分細

末おし水少して調附べし○酒刺るは乾姜一匁少して三

匁もても練く煮しよるやぐよし常のめく一番計は煎

し手のつけられぬやぐ熱く煖め烏の羽縮きれよて

も浸し鍊漿あり煖るやぐはちくくとサクロは畜押て

練く附やぐは押畜てよし○婦人妊娠の時血とらふは

ハ乾姜地黄等分粉おし一匁づ酒を以て晝も三度夜

三度づ用ふ○菜菔の毒の中は乾姜番椒甘州

各等水にて常の如く煎し用ふ○巴豆の毒と解は乾

姜黄連各等細末おし水少して茶一服やぐ用ふべし○虫

少て固腹と治る方霍乱し乾姜七硫黄三細末おし糊小

て小豆の大きさ丸湯にて二三十粒づ用ふ以上和方

○薑附湯霍乱轉筋手足冷て汗多乾姜熟灰は附子炮調

甘州炮て各細坐して毎服四錢水二盞はじかき五片入

し○又方黒大豆一升焼て熟^{アツク}酒二升入一宿と
 腫^ハて汁^ハ共^ニ服^ス○又方黒大豆十二粒と純^ニ拭^ク淨^ト
 朝晝晩と一日^ニ三度^ニち^テ百日若ハ二三百日乃至一年
 服^スじ又凡の諸病^ニ宜^シしきあり
 以上萬安方

米^カ賀^カ和名^ニ鉈^ニ○即^チ藁^ノ荷^ノ子^ノ万葉^ノに^テも^テ久^クて^モ舊^クく^テ分^ケる^ルなり
 此^ノ物^ノの^ハけ^レめ^ニ芽^トとい^フを^モ時^ニ其^ノ色^{赤^シ}赤^シ米^ハ芽^{アリ}なり
 今^ノ俗^ニ米^ノ字^ヲ賀^トとい^フひ^しと^モ米^ノ賀^ノの^{伸^ル}伸^ルる^ルあり^{俗^ニ}
 加^ヘ今^ノの^{俗^ニ}米^ノ字^ヲ賀^トとい^フひ^しと^モ米^ノ賀^ノの^{伸^ル}伸^ルる^ルあり^{俗^ニ}
 若^ク荷^ノの^{二^ノ}字^ヲと^モ假^ル用^スる^ルを^モ米^ノ賀^ノの^{辞^ニ}辞^ニよ^リる^ルあり^{俗^ニ}
 子^ノ冥^{加^ヘ}の^{意^ニ}取^リま^シり^{唐^ノ}唐^ノ音^ノの^{訛^ト}訛^トい^フハ^{あ^ラう^ル}あり^{俗^ニ}
 藁^ノ荷^ノ 覆^ノ菹^ノ 藁^ノ艸^ノ 別^ニ株^ト 蓴^ノ苴^ノ 上^ニ林^ノ
 唐^ノ民^ノ以^テ嘉^ノ艸^ト除^ク毒^ヲ○荆^ノ楚^ノ歲^ノ時^ノ記^ニ云^フ
 仲^{冬^ノ}冬^ノ鹽^ヲ藏^ス藁^ノ荷^ノ用^ニ備^ス冬^ノ諸^ノ又^ニ以^テ防^ス蠱^ヲ

延喜式^ニ營^ノ藁^ノ荷^ノ一段^ノ種子^ニ三石^ノ總^ノ單^ノ功^ニ三十五人^ノ畧^トあり
 二月^ノ根^ヲと^モ移^スべ^シ堀^ニ子^ノ狹^ク楸^トとい^フじ^とい^フは^{性^ニ}性^{陰^ニ}陰^{地^ト}地^ト好^ム
 む故^ニ子^ノ樹^ノ下^ノ河^ノの^{ひ^ハ}山^{陰^ニ}陰^{南^ニ}南^{董^ノ}董<sup>の^{不^マ}不^マと^モ水^{邊^ニ}邊^{下^ニ}下^{濕^ノ}濕^{の^{地^ト}}地^ト
 子^ノ藝^{茂^ル}茂<sup>る^{潘^ノ}潘^{安^ノ}安^{仁^ノ}仁^ノ賦^ニ藁^ノ荷^ノ依^{陰^ト}陰^{と^モ}依^マり^{米^ノ}米^{賀^ノ}賀^{の子^ハ}子^ハ
 即^チ藁^ノ荷^ノ花^{アリ}赤^{白^ニ}白^{二^ノ}種^{アリ}赤^{き^ト}き^{と^モ}と^{よ^シ}し^{と^モ}夏^{月^ノ}月^{の^{新^ニ}}新^{芽^ハ}芽^{生菜^ノ}菜<sup>の^{尤^ノ}尤^{韻^ニ}韻^{致^{アリ}}致<sup>ある^{もの^ナ}なり<sup>秋^{月^ノ}月<sup>の^{花^{房^ト}}花<sup>房^{も^{ち^と}}淡^{美^シ}
 美しい<sup>い^{ふ^ハ}ふ^ハ藁^ノ荷^ノの^{菹^ト}菹^{とい^フ}ハ^{新^ノ}新^{芽^ハ}芽<sup>花^{房^ノ}房^{の^{美^ト}}美^{と^モ}と^{ふ^{べ^テ}}
 べてい^{ふ^ハ}ふ^ハ本<sup>朝^{式^ニ}式<sup>内^{膳^{部^ニ}}膳^{部^ニ}に^{載^ス}り<sup>庭^{訓^ニ}訓^{往^{来^ス}}往^{来^ス}ハ^{酢^{漬^ス}}
 酢^{漬^ス}藁^ノ荷^{とも^{あり}}今^ハあ^らう^{四^ノ}四^{時^ヲ}時^{を^{け^レ}}け^レて^{その^{苗^ト}}苗^と</sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup>

のくる衣ハツケ自然シラの種ハ八月の頃其上と踏フミかゝるめ冬月
米糠或は馬屎ウマノコをもて煮ヌひ復タビその上へ稲イナ州シラと履オホヒを根
肥ユヱ壘ツクリて来春蕃フユ衍ユスののびく年トシく培ヤシヒ表ヒとくくまバ永トシく
絶ツクて其コノ茎カの長條ナガふると陰カミ乾ヒし細ホソ裂ヒて繩ヒとし履フキとし
馬ウマ沓クツとすべし

氣味根は辛温シヤン小して毒ドクあり新芽花房を微辛シヤンありて清
香カウあり多食タシクすれば上氣ジョウキと発ハツす○主治河鮑カハの毒ドクあり
アアア小蕺荷の根汁と服すれば解トク濟キ急キウ○雜物目イラ目メ目メ目メ
ていづづシ小白裏荷根と搗ツキて目中メ注ツクけバ即出ソツ或ハ
礬石カンシの末と少し加クふるとよしやと今の風俗フウは其根と

搗ツキ碎サイ水スイ澄シし粉コと取ツク日ヒ晒ヒ乾ヒて蓄タマるもの薬戸ヤク此コノと茗石メイシ
とつツの方カタ聖セイ惠ヱ○薬を服して劑ジはるるるる蕺荷の汁と飲
べし秘要○口舌色黒くあるは蕺荷白根と煨ユて醬油
に浸ヒし是と摩サるべし○舌に瘡カの発ハツくるとハ蕺荷の根
と擦スて取ツクて附吸ツクべし○陰囊腫皮イン禿カくとハ蕺荷の
葉生ハうて包ツク切ツクちバ自然シラに治ナるあり○小兒痘瘡目コ入ニ
ざる方蕺荷小根と能ツク洗ヒ石イシうて敲ツクき其汁と水ミヅたて
去イりて粉コふし目メはくべし○小兒痘瘡後の眼病コは
ハ蕺荷の根と煮ヌて能ツクく洗ヒ搗ツク汁シと水ミヅ起ヒして其粉と
取ツクて目メはくべし○白シラ充シハ蕺荷根大枯礬カ硫リウ黄ワウ各丹中

少四味研て麻油アサヒにて調布アサヒの色イロと揩塗カキべし○目メは稻芒イネノカサ
 の謎メて出イざるハは藁荷ワラノカサ根ネ搗ウちツりてその汁ジと入イべし
 ○突目ツクメと治ナる方藁荷ワラノカサ根ネ十月霜月シヨクシヨウゲツ掘根ウチの端ハタは顆カあれ
 何ナニとシて土氣ツチノキなりシやうニ洗ワシ淨ニて搗ウチ碎クきテ縮マりて濃
 煮マるルも汁ジといハせテ上水ウヅと持テ二十遍ニジュヒも晒ヒて干ヒ粉コ
 小コし精雪カキトホシ艸ノ葉ハと按ミ出シ汁ジ少シて點チを非の汁ジ按ミ出シ
 汁ジ少シく點チもよし馬ウマ腎ニあらぶハ小コさしてもよし以上和方
 ○吐ク血痔クツキ血ク婦人メノヒト腰ウシ痛イタ之ノ腸風ウツ等ノは藁荷ワラノカサ根ネの東ヒ方
 一ヒ指サと揉搗ウチ經ツ汁ジと一ヒ度ヒ一ヒ盞ツづゝ服ハべし萬安

成形圖說卷之二十四終

